

「主イエスの弟子になる」

2015年07月21日

ルカによる福音書9章57節～62節。一行が道を進んで行くと、イエスに対して、「あなたがおいでになる所なら、どこへでも従って参ります」と言う人がいた。イエスは言われた。「狐には穴があり、空の鳥には巢がある。だが、人の子には枕する所もない。」そして別の人に、「わたしに従いなさい」と言われたが、その人は、「主よ、まず、父を葬りに行かせてください」と言った。イエスは言われた。「死んでいる者たちに、自分たちの死者を葬らせなさい。あなたは行って、神の国を言い広めなさい。」また、別の人も言った。「主よ、あなたに従います。しかし、まず家族にいとまごいに行かせてください。」イエスはその人に、「鋤に手をかけてから後ろを顧みる者は、神の国にふさわしくない」と言われた。

主イエスは十字架の死を決意してエルサレムに向かわれた。その時の様子をマルコ福音書10章32節に「一行がエルサレムへ上って行く途中、イエスは先頭に立って進んで行かれた。それを見て、弟子たちは驚き、従う者たちは恐れた」と記されている。ある人が、主イエスの働きについて見聞きし、決然と上京する主イエスを見て、「あなたがおいでになる所なら、どこへでも従って参ります」と申し出た。彼は心底、主イエスに従って行きたいと思ったのであろう。主イエスは、「狐には穴があり、空の鳥には巢がある。だが、人の子には枕する所もない」と木で鼻を括ったような返答をされた。動物や鳥には休むべき巢穴がある。しかし、人の子（主イエス）に枕する所もないほど、多忙である。あなたは燃え上がった心で信従を口にしますが、とても全うすることはできないだろうと言われた。別の人に、「わたしに従いなさい」と言われた。彼は「主よ、まず、父を葬りに行かせてください」と答えた。死んだ家族を丁重に葬ることは揺るがせない掟であった。ところが主イエスは、「死んでいる者たちに、自分たちの死者を葬らせなさい。あなたは行って、神の国を言い広めなさい」と、家族に対する礼よりも「神の国」の宣教が優先すると言われた。また、別の人が、「主よ、あなたに従います。しかし、まず家族にいとまごいに行かせてください」と言った。主イエスは「鋤に手をかけてから後ろを顧みる者は、神の国にふさわしくない」と、一度決心したら、振り向くなと言われた。

この問答は、列王記上19章の故事に関係していよう。預言者エリアがエリシャを弟子として呼び出した時、エリシャは「わたしの父、わたしの母に別れの接吻をさせてください。それからあなたに従います」と答えている。これが許され、家族、村人たちと宴会を催した後、エリアに従い、仕えている。主イエスは、死者は死者に葬らせよ、鋤を手にかけてから後ろを顧みるなど、全てに優先して「神の国」の宣教に向えと厳しく求められた。この求めに応えることは容易ではない。

初代教会において、洗礼を受けて教会の群れに加わることは家族との関係を断ち切ることが多かったのではないか。信徒たちは誤解と偏見の中で闘ってきたのである。日本でも、教会に行くことは許すが、洗礼を受けることは許さないというケースが多々ある。「洗礼を受けなくとも、あなたは既に救われている。その内、理解されるから、礼拝を守るように」と私は言ってきた。キリスト教が市民権を得るために、信仰の先達は血を流してきたことを思い、ただ感謝である。主イエスの弟子になっても、躓くことはある。躓いた時、支えてくれる教会の友がいるか。支えられる友を持ち、支える友になることである。